

ダライ・ラマと密接な関係にある護法尊のネチュンが、COVID-19 をめぐって、託宣をつうじて授記した。その中身を耳にしたのは、チベット暦の大晦日にあたる 2 月 22 日のことだった。

年末の一週間から新年にかけて、ボードナートでは、さまざまな法要や祈祷が行われる。シベリアのシャーマンとそっくりの格好をし、太鼓とラッパを派手に鳴らしながら進むタマン族の霊媒たちの行進や、一年の厄をすべて払いのけるヤマンタカの法要を横目に、その日、私は、パドマサンバヴァと密接なつながりを持つ行場であるパルピンに上った。

部屋に荷物を運び入れ、食料の買い出しに出る。バザールに向かう道の途中、見慣れた後ろ姿を見つける。知り合いの尼さんだ。二十年ほど前、チベットのラサ南郊にある尼僧院から逃げてきた。パルピンに新しく作られた密教学堂で、伝統的な三年三か月の隠棲修行を終え、その後も、一年の半分は隠棲修行、残りの半分は灌頂や法要に出かける生活を続けている。ゆったりした足取りで、新しくできた国際送金の店に入っていく。

オーストリアに移住した友達のお母さんが亡くなった。その追善回向のためのお金を受け取りに来たらしい。黒い防塵用のマスクをかけている。

「ずいぶん立派なマスクだね」

「この間カトマンドゥに祈祷に行ったら、施主のおばあさんがくれたのよ。疫病が流行っているから。気をつけなくちゃね」

坂道をいっしょにぶらぶら歩きながら、買い物をし、小さな食堂でお茶を飲む。1 週間ほどしたら、また六か月間の隠棲修行に入る予定らしい。ひとしきりお互いの近況を交換したのち、自然と話題はコロナ・ウィルスになる。彼女のスマホには、感染状況をリアルタイムで知らせる中国語アプリが入っており、それを見せてくれる。

「中国政府が隠さなければ、こんなに世界中増えることはなかったんじゃないかしら」

「多分ね。ところで、ボードナートでは、タマン族の人たちが、ターラの祈祷をやってたけど」

「そうね。私たちも、いろいろと祈祷したわ。ネチュンの託宣が、「マモ・トゥクカン」を行じるように言ったのは、知ってる？」

「マモ・トゥクカンか、、、」

私は、思わず鸚鵡返しにつぶやいた。この言葉を聞くのは、久しぶりだ。2006 年に東北チベット・レプコン(青海省同仁)で、牧草がすべて枯れ、奇病が流行った。その時以来かもしれない。

「マモ」は「母なる女神」、「トゥクカン」はその怒りから生じる争乱や混乱を、懺悔や供養

によって静めることを意味する。

チベット土着のボン教は、大地や岩、湖、空を住処とする精霊についての豊かな科学を発達させた。この「精霊の学」と、インド由来の天竜八部衆の概念が融合し、チベット流の天竜八部衆の体系は誕生した。その中で、マモは独自の位置を占めている。

マモは、黒または暗褐色の体で、髪を振り乱し、裸で踊る老婆として表象される。その性質は、インドの地母神であるマイトリカたちと基本的に同じだ。人間やそれ以外の生命を支え、豊穡をもたらす存在であり、その一方で、人間の過った行為に怒ると、病や自然災害、さらには戦争を送ってくる。

ロンチェン・ニンティクの体系に属す護法尊供養の儀軌には、次のように書かれている。

「とりわけ濁世の時代、

マモたちは、輪廻の世界の幸福と苦しみを作り出す。

五大の本質は、五人の母なる女神たちの原初の空間(法界)だ。

それゆえ、マモたちは、存在の母なる女神と呼ばれるのである。

法界に、分別は存在しない。

だが、法界に内蔵される力能から、化身があらわれる時、

マモは、善悪を見抜き、裁断する。

行者たちは方便にうとく、世間は昏迷の中であって、

女神たちとの誓約をないがしろにし、、、そのみ心に反する行為をなしている。

その過ちを、懺悔します。」ⁱ

ここには、大きく二つのことが書かれている。

一番目は、マモと自然界を構成する五つのエレメントの関係だ。

私たちの身体も、その環境も、地、水、火、風、空の五つのエレメントから成り立っている。

その本質は、法界から立ち上がってくる五色の光であり、マモたちの本質も、同じく光だ。五つのエレメントからできている自然を貪欲に支配し、破壊する行為は、存在の母であるマモたちを傷つける。

二番目は、純粋な光のエレメントであるマモが、存在の世界に姿をあらわす時、不調和を調整する—「善悪を見抜き、裁断する」—知性が受肉するということだ。

マモの争乱の原因となる人間の行為は、大きく二つに分かれる。

一番目は、—インド、チベットの伝統的文化から見た時の—一人倫の乱れだ。同じくロンチェン・ニンティクの体系に属す「マモ・トゥクカン」の儀軌には、次のように書かれている。

「とりわけ、マモの争乱によって、世間に不幸がもたらされる一次的な原因(「因」)は、

サンガが争い、乱暴な振る舞いに走ること。
家族を持つ者たちの心を悲しませ、屠殺所をうろつくこと。
密教行者がサマヤ戒を守らず、呪詛を放ち、
生起次第と究竟次第に確信がないまま、仏法を売ること。
人は約束を守らず、毒を盛り、サンガは戒律を破り、父母を欺く。
泥棒、盗賊、狩猟によって生活し、互いに争い、卑しい行為に走る。
兄弟姉妹の関係が汚れ、近親相姦で生まれた子供を殺す。
そんな悪しきカルマがあらわれる時、
ダキニたちは背を向け、マモたちは騒乱を引き起こす。
どうか背を向けず、お慈悲によってご覧ください。」ⁱⁱ

マモの怒りを引き起こす社会秩序の乱れには、極度の貧困や飢餓を放置することも含まれる。
カルマ・チャクメの書いた別の短い儀軌には、次のように書かれている。

「濁世の果ての時代、秘密真言の教えが呪術に墮落し、
父の言葉を息子は聞かず、近親同士が争い、、、
食に貧しく、口にすべきでないものを食らい、
着るものに貧しく、ひどい恰好をし、
サンガが争い、家族がおとしめあう時、
黒き母なる女神は怒り、、、さまざまな人間の病、動物の病を送り、
空間は、紫の病の雲におおわれる」ⁱⁱⁱ

「マモ・トゥクカン」を行じるように、というネチュンの託宣がいつ降りたのかは、はっきりしない。けれども、武漢の華南海鮮卸売市場が閉鎖された翌日、1月2日から6日まで、ブッダガヤで行われた法会の最後、ダライ・ラマは、こんなふう述べたという。^{iv}

「あなたたちは、今回、菩薩の道について学び、密教の灌頂を受けました。そして、儀式の最後には、「金剛阿闍梨のお言葉通りに、実践します」と三回繰り返しました。そこで、金剛阿闍梨として、あなたたちにお願ひがあります。アフリカで飢餓に苦しむ人々のために、募金をして下さい。アフリカでは、飢えのあまり、人糞を食らっている人々がいます。これを放置しておくことはできません。後で、募金箱を設置します。集まったお金は、しかるべき機関をとおして送金します。」

マモを怒らせる二番目の原因は、動物の虐待、自然や生態系の破壊である。そこには、仏教

の伝統的価値観が反映されている。

「他にも、マモが争乱を引き起こす副次的原因(「縁」)はある。……、

女神の乗り物であるロバとラバに足かせを付け、殴り、不潔なままにしたことを懺悔します。

女神の儀式に使われる野生の驢馬を狩り、哭かせ、恐怖させたことを懺悔します。

女神の財宝である黒い鳥を怖がらせ、乱暴に殺したことを懺悔します。

女神の愛する友である豚飼いに悪口を言い、邪魔したことを懺悔します。

女神の飾りである孔雀の夫婦を引き離したことを懺悔します。

女神を汚す鉄鍛冶の未亡人を身近に置き、召使いとしたことを懺悔します。

不浄なものを燃やし、悪臭で汚染することは、女神の毒となる。

そのことに気づかず、散失したことを懺悔します。……、

法界にある女王の心が、怒ることはない。

だが、その眷属であるマモとダキニたちは、過ちを目にした途端、罰を加える。」

v

動物の虐待、野生動物の乱獲、自然環境や生態系の破壊は、マモたちを怒らせる。

2000年代のはじめ、青海省の中南部は、開発ラッシュのさなかにあった。2005年、レプコンの北部にある人造湖のほとりで、三つの工場が操業を開始した。その翌年、周囲の牧草地には一本も牧草が生えず、羊たちは全滅した。レプコンをゆったり流れる川は、黄河と長江の両方の源流にあたる。中国政府は、あわてて工場の閉鎖命令を出し、翌春牧草地は元に戻った。

同じ年、レプコンの南部で奇妙な病気が流行った。自分も病に侵された工場主は、強烈な神通を持つと評判の地元の密教行者に祈祷を頼んだ。行者は、「マモ・トゥクカン」の大きな法要を行うとともに、ビニールを燃やすのを止めるようにいった。工場主は、治癒し、そのまま工場を閉じたのである。

先ほど見たように、ロンチェン・ニンティクの「マモ・トゥクカン」は、マモたちの怒る原因を、主要な原因(「因」)と副次的な原因(「縁」)に分けて、説明している。

仏教の縁起説は、主要な原因(「因」)と副次的な原因(「縁」)はつながっており、両者が重なる時に、出来事は生まれると考える。マモたちは、法界から立ち上がってくる力であり、同時に、因と縁からなる縁起の運動を調整する知性を象徴している。

それにくわえ、マモたちは、異なる進化の系列の間を横断し、遺伝子の交換をつうじて進化を促進するウィルスと、よく似た性質を持っている。マモたちは人間やクマやフクロウといった動物に化身する。存在の母であるマモは、因と縁、人間の世界と動物や環境の世界をつなぎ、異なる生命種の「間」を横断するのである。タントラには、次のように書かれている。

「マモには、原初の智慧から生まれたものと、世俗のカルマから生まれたものの二種類がある

ことを理解しなさい。原初の智慧から生まれたというのは、法界なる六人の仏母から、秘密に生まれたものたちである。、、、七人の女神たちの下には、カルマから生まれたマモたちがいる。これらのマモたちは、世間で愛し合う男女の有情たちから生まれたのであり、その数は多い」(「存在の容器」)^{vi}

「黒い女神は、恐ろしい羅刹の姿をし、有情を生むから「マモ」と呼ばれる。恐ろしい形相を示し、食べることを好み、女の姿で化身するから、「マモ」と呼ばれるのである。」(「聖なる黒い女神の秘密真言のタントラ」)^{vii}

マモは縁起によって新しい生命を生み、さらに、人間として、動物として、生きた生命として姿をあらわし、縁起を調整する。急速に拡大する疫病は、人倫の崩壊と、生態系の破壊に対するマモからの警告だと、密教経典は語る。

<サキヤの祈り>

3週間後、私は、ボードナートに下りた。わずかの間に、イタリアの死者は急激に増え、目玉寺院の周囲の光景も、大きく変わっていた。多くの僧院が閉鎖され、そうでない場合も、敷地に入るのに、発熱がないかチェックされ、両手をアルコールで消毒しなければならない。マスクの着用率は、さらに上がっていた。

この時期、サキヤ・コンマ・リンポチェは、インターネットをつうじて、タントン・ギェルポ(1385-1464)の「サキヤの病を救う祈り」(Sa skya nad grol ma)の伝授を行った。^{viii}

さらに3月後半、イタリアだけでなく、ヨーロッパ全体、さらにアメリカで感染が拡大するとともに、欧米で教えてきたラマたちの多くが、縁起と無常に思いを馳せ、あるいはみずからのパニックやストレスをあるがままに見つめ、状況を受け入れるように呼びかけるようになった。

「サキヤの病を救う祈り」には、特別な由来がある。サキヤの本山で疫病が蔓延し、「ド」をはじめとする祈祷を行っても効果がなく、無人になろうとしたとき、タントン・ギェルポは、あらゆる有情がブッダとなりますように、という菩提心を起こし、観音菩薩の真言を唱え、この言葉を唱えた。その瞬間、疫病は跡形もなく消え去ったとされる。

世界中で、今多くの人々が、同胞の命を助けるために必死で働いている。その努力によって、ウイルスをある程度コントロールし、ワクチンなども使いながら、共生することもできるようになるだろう(そのためには、「先進国」と「発展途上国」をしっかりと結びつける体制が必要だ)。

だが、わたしたちが巨大な縁起一本当は、その範囲はこの惑星も遥かに越えている一のネットワークの中にいるかぎり、そしてわたしたちの文明が、マモを傷つける構造を持っているか

ぎり、その争乱を避けることは、これからもできない。

ヒュブリスに陥ることなく、相互依存のネットワークである惑星の全体を俯瞰できる科学の発達に努める。最前線で不眠不休で働く人々を、またお互いがお互いを支える。トリアージによって放置され、あるいは家族に会えないまま隔離病棟で亡くなる人々のために祈る。そして、繰り返す困難を、自己と、社会と、私たちが手にしている科学の内部に潜在している限界を解き放ち、学び、よく変容するための機会として使う。COVID-19は、私たちが、そうした道のりを、これから長く進んでいかなければならないことを予示しているように思われる。

ⁱ b Ka' srung ma mgon lcam dral, rDzogs pa chen po klong chen snying thig gi 'don cha, nd, pp. 373~374

ⁱⁱ Ma mo mkha' 'gro'i 'khrugs skong, ibid., p.390

ⁱⁱⁱ Ma mo'i 'khrugs skang rgyun khyer, in Chos spyod skor phyogs bsdus, sKal bzang chos dbang, 2004, p. 48

^{iv} ンガワン・ドルジェ氏のオーラル・コミュニケーション。

^v Ma mo mkha' 'gro'i 'khrugs skong, op.cit., pp. 390~391

^{vi} Srid pa'i bems, NGB(mTshams brag), vol. 41 (Di), pp.101~102

^{vii} 'Phags ma lha mo nag mo'i ro ga nag mo'i gsang sngags kyi rgyud, NGB(mTshams brag), vol.42(Ni), p. 650

^{viii} <https://www.youtube.com/watch?v=DgZETpd9h5s>